

## 第 34 回福山大学グリーンサイエンスセミナー 福山大学 福山市、2016 年 1 月 8 日

中越信和（広島大国際協力研究科）：里山と里山文化景観の保全

今、里山についての関心が高まっている。里山とは自然林を意味する「奥山」に対する二次的攪乱を受けた森林を意味する。特に、持続可能な管理を行っている場合に、真の「里山」とみなされている。里山はかつて学術的に評価されることが殆どなかったため、生態学的研究をはじめ関連分野での研究例は限られていた。研究の契機は、環境省が 1989 年に RDB を初めて出版し、続いて 2002 年に改訂版の生物多様性国家戦略の出版時に絶滅危惧生物種が里地里山に極めて多いことを公表したためである。演者は広島で生態学の研究を始めたので、里山は初めから研究対象であった。しかし、使命感を持って研究を始めたのは 1983 年に韓国に招聘されて里山を研究したことから始まる。以来、多くの内外の生態学研究者と研究を行い、教員になってからは里山研究者を育ててきた。なかでも、環境省が 2010 年に COP10 名古屋で「里山イニシアティブ」を国際的に提案するに至り、里山の生態学的研究は国を背負う大きな研究課題となったことを歓迎している。最近、里山資本主義なる用語（藻谷, 2013）が社会的に広く認知されてきているのも朗報である。

此度、福山大学に招聘され、私とその仲間が行ってきた里山研究を生物学の先端業績を紹介するグリーンセミナーで発表できることを光栄に思っている。しかし、里山研究はこのセミナーが扱う先鋭的な研究ではない。地味な研究分野である。講演でも言及するが、学術貢献の方向性が少し異なっている。ともかく、この講演では里山の存続に必要な点を以下の 4 点に集約するが、これに関してもご議論いただければ幸いである。

- ① 木質資源として活用し、エネルギー政策の一部として位置づける。
- ② 日本の約 40%の絶滅危惧種の生育・生息地として、そのハビタット管理を行う。
- ③ 日本文化を支えた歴史的所産として、文化財（文化的景観）として保全する。
- ④ 身近な自然としての復権を計り、ニューコモンズとしての政策的課題とする。

実際にこれらの点について、総括的研究は未だ行われていない。それは自然科学（生態学）、社会科学（里山資本主義）、及び人文科学（文化財）の全てのアプローチが必要で、さすがに個人の単位ではこの研究の遂行が不可能であるためである。本セミナーでの課題提起から、総合的に里山に関心をもたれる方々が福山大学に現れることを期待する。

参考論文（この一部の印刷物は配布）

西条・山と水の環境機構 10 周年記念誌 山づくり、水づくり、美しいふるさとづくりの

あゆみ. 96pp. 西条・山と水の環境機構、東広島市

中越信和 (2014) 自然公園における里地里山. 環境研究 174: 31-43

中越信和監修 (2015) 第 14 回ひろしま山の日県民の集いの記録. 59pp. ひろしま「山の日」

県民の集い実行委員会、広島市

鎌田磨人・白川勝信・中越信和 責任編集(2014) 日本生態学会編 エコロジー講座 7

里山のこれまでとこれから. 71pp. 日本生態学会、京都

公益社団法人広島県みどり推進機構 (2015) ひろしまの緑 65. 8pp. 公益社団法人広島県

みどり推進機構、広島市

藻谷浩介 (2013) 里山資本主義. 308pp. 角川書店、東京

山場淳史・渡邊園子・斉藤一郎・中越信和 (2009) ボランティア団体による木質バイオマス

活用を目的としたマツ林型里山保全活動を支援するための技術的検討と合意形成過程.

景観生態学 14(1): 73-81

和田秀次・中越信和 (1994) 温帯林の遷移と構造. 日本林学会論文集 105: 271-274